

「教育改革」って、何だ

田中 史郎

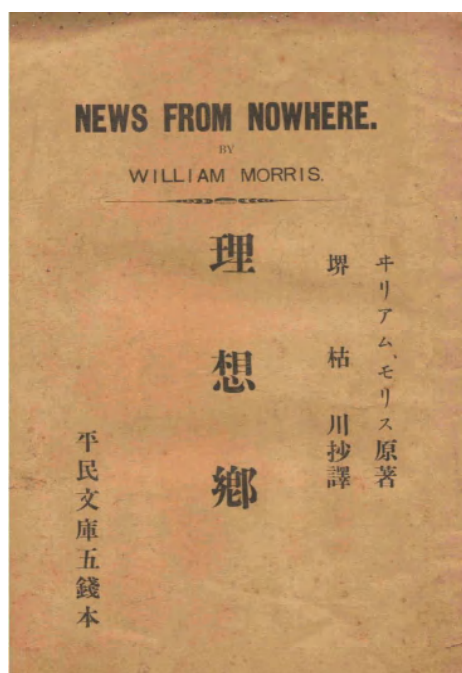
この一年も色々なことがあった。まず、夏休みに、「賢治とモリスの館」を訪問したことを記しておこう。

テレビなどでも数回にわたって紹介されているので、すでに知られていることだが、この館は大内秀明先生のプライベートな別荘である。小生は先生の門下生ではないが、20年以上の前から縁あって色々な機会にご指導を賜っている。この別荘を建立されたと聞いて、一昨年一度、伺ったことがある。その時からそこでゼミをやりたいと思っていたが、それを先生に話したところ、了解してくださった。

そのような経緯で今年の夏休みにゼミ生と共に訪問したのだが、その際に2年生を中心に「ネットから見るウィリアムモリス」と題した報告をしてもらった。資料をパワーポイント(PPT)で作成し、それにそった報告であった。

リップサービスもあるだろうが、これが高く評価され、その続編も作成してほしいとの依頼を受けた。また同じ手法でやるわけにはいかないの、実は困っている。これからゼミ生とも相談しなければならないが、モリスの『ユートピア便り』*をPPT化しようかと思っている。

*『ユートピア便り』というのはなかなかの名訳であろう。原著タイトルは、“News from Nowhere”であり、初の翻訳である堺利彦(枯川)訳では『理想郷』となっている。これも名訳だ。



* * * *

さてこのところ、教育改革と称して、政府による教育制度の「改革」が進められようとしている。本年度の『人間文化論集』（第9号）「巻頭言」にも書いたので、それをとりあえず転載しておこう。

この間、あわただしく教育「改革」が進められようとしている。昨年末に教育基本法が「改正」されたのを皮切りとして、この1月24日には教育再生会議の「第1次報告」が示された。これは、今後の教育関連三法（教員免許法、学校教育法、地方教育行政法）の「改正」を射程に入れたものと言われている。翌日の各新聞はこれを大きく取り上げている。幾つかの新聞を参考にしてまとめると、そのポイントは、①ゆとり教育の見直し、②いじめ加害者の停学、③奉仕活動の必修化、④教員免許更新制の導入（教員免許法の改正）、⑤副校長・主幹職の新設（学校教育法の改正）、⑥学校を監査する教育水準保証機構の設置、⑦教育委員会を外部評価する第三者機関の設置（地方教育行政法の改正）などである。この項目を一瞥しただけでも、一方で児童や生徒を教員が締め付け（①②③）、他方でその教員を校長や管理職が締め付け（④⑤）、さらに学校を外部から監視し（⑥）、そしてなおもそれを外部評価する（⑦）という、雁字搦（がんにじから）めの管理体制を作ろうとしていることだけは見て取れる。教育再生会議の方々には、何やら監視や評価をしないと不安でたまらないのだろうか。こうした方向に教育の「再生」などあろうはずがないが、これらの提言は単なる思いつきを並べた以上のものではないようだ。

というのも、これが歴史的な分析を、あるいは教育現場の実情を踏まえて導かれたものとは思われないからだ。教育の「再生」というが、再生とはかつては「生きて」いたものが「死に」、それを再び「生き返らせる」という意味だが、そうだとしたら、日本の教育は何時まで「生きて」ており、それが何時どの様な原因で「死んだ」のか、こういった分析が不可欠だか、そのような思考は見られない。たとえば、かつての日本の教育が「生きて」いたというのなら、それは何時なのであろうか。戦後の高度成長期なのか、戦前のファシズムの時代なのか、大正デモクラシーの時代なのか、はたまた、明治期か、それとも徳川時代か…。そしてその判断のメルクマールは何なのか。

この教育再生会議メンバーの方々には、「生きて」いた時代の教育を受けたことによって「立派な大人」になったのだろうか、それとも「死んだ」教育を受けたにもかかわらず「立派な大人」になったのだろうか。つまり、あなた方自身が、良い教育の結果なのか、それともそうではないのか。やや茶化しているように見えるが、こうしたことを踏まえないで、思いつきの提言では現場を混乱させるだけだ。管理体制の強化と教育内容の充実とは何ら関係がない。むしろ、「管理」と「教育」とは正反対の内実を含む。こうしたことは教育に携わったことのある人々に聞けば、必ず帰ってくる答えだろう。本学と本学科の理念や体制は、そのような「管理」とは対極にあることを誇りに考えている。

見られるように、ここでは、これからの「改革」が「雁字搦めの管理体制を作ろうとしている」ことを明確にし、しかし、そうした方向は、本来の教育とは無縁であることを強調した。

だがそこでは、紙幅の都合もあって、これ以上には触れられなかった。ここで、もう一つの視点を提起しておきたい。

それは、教育に求められている最も肝要のことは、「教師が勉強をすることである」ということである。巷では、教員はその教育内容をすでに十分に理解し、問題はその「教え方」、つまり教育方法にあるというように言われている。しかし、そうだろうか。

小学校から大学まで、どの教科の教師であっても、その内容に精通しているとは限らないということだ。例えば、高校の「政経」の教員でその内容をかなりのレベルで理解している人はどの程度いるのだろうか。ふつう高校の政経の教員になるのは、大学の法学部か経済学部出身者だが、前者ならば経済学の、後者ならば法学の素養が足りないことは当然である。だから本来は、教師として職に就いてから必死に勉強しなければならないのである。しかし、高校教員の悪口を言うためではないが、実態は必ずしもそうではない。それを行うだけの時間がないように感じられる。そして近年の管理体制の強化は、さらにそうした時間を奪っているように思える。

ここで、エピソード1

昨年、三田紀房『ドラゴン桜』のモデルになったと言われている予備校教師である竹岡広信のドキュメント番組（NHK『プロフェッショナル、仕事の流儀』06年3月）を見た。その教師の姿に、半分は驚いたが、半分は「あまりに当然なこと」とも感じた。

彼は英語の教師だが、その「英単語」を教えるに当たって、ラテン語の語源から展開していた。どうやらこれは、単にこれだけではなく、日常的にそのようだ。単なる暗記ではなく、語源まで遡って議論を展開できる教師その人自身の勉強量に驚いた。

むろん、そうしたレベルでの理解を求めるがゆえに、逆に生徒からの質問も本質にせまったものだ。それゆえ、即答できない間もあるという。そこでだが、そうしたさいには、講義を中断してでもその場で調べるといふ。絶対に「ごまかさない」ということを信条にしているとのこと。これには頭が下がった。

「子どもは親の背を見て育つ」という故事がある。これを振って言えば、「学生や生徒は教師の背を見て育つ」ということだろう。この教師のいわゆる「教え方」のテクニックは必ずしも優れたものではない。しかし、問題はそのようなところにはない。この授業を受けた生徒たちの言葉によれば、先生が徹底的に勉強する姿勢に感動したとのことだ。

さらに、エピソード2

かつて、小生が学生の時代にこんなことがあった。講義の時間が始まってしばらくすると、いつもどおり教員がやってきた。その先生の様子はいつもとやや違っていたが、教壇に立つと、おもむろに今日の講義を中止するといって帰って行った。その理由は、今、締めきり間近の論文を書いているのでとても「講義などやってられない」ということだった。学生の方も慣れたもので、「ああそうか」という感じだ。

そして、それから半年くらい経過した後で、あのとときの論文がプリントされ配られた。当時、小生はそれを「あのとときのアレが、コレか...」と、妙に実感をもって読んだものだ。今日ではこのようなことは許されないかもしれないが、教員の学問に対する姿勢に圧倒されたのであった。

もはやお分かりであろう。教育にとって最も大切なことは、教員それ自身が如何に勉強

するか、そして恥も外聞もなくそれをさらけだせるか、これである。教育改革とは何よりもこうした環境を整えること以外にない。自らの反省も含みつつ、そのように確信している。

* * * * *

今回も論文をPDFにした。多少は読みやすくなっただろうか。さて、最後になったが、本CD版を作成するに当たり、榎本千夏子くんにお世話になった。記して感謝の意を示しておきたい。

(2007年3月)